

## 原典で読む

## 外国人が見た日本

## 高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



## 第十八回 ミッドフォード『英国外交官の見た幕末維新』(上)

「その美しい寺は、周囲を丘や林や池などで、これ以上ないほど優雅に囲まれた聖域に隠れるようにして建っていた」

今回ご紹介する人物は、幕末から明治初期にかけて、イギリスの外交官として滞在した初代リーズデイル男爵アルジャーノン・パートラム・フリーマン・ミッドフォード(一八三七―一九一六)です。

ミッドフォード家は、祖先を遠く遡れば、フランク王国のシャルルマーニュ大帝に繋がるといふ由緒深い名門貴族でした。彼は、アルジャーノン・パートラム・ミッドフォードという名前から、従兄弟のリーズデイル伯爵ジョン・トーマス・フリーマン・ミッドフォードが未婚のまま

ま亡くなったことで、その遺産と共にフリーマンの名前と紋章を受継ぎ、以後フリーマン・ミッドフォードと名のることになりました。一九〇二年にリーズデイル男爵家の初代となり、イギリスのノーサンバーランド州を治めることになりました。

彼が外交官として日本にやって来たのは、慶応三年(一八六六)のことで、上司同僚には学歴のない所謂叩き上げのハリー・パークス公使、ラトヴィアからの移住者の子で通訳生のアーネスト・サトウ、アイルランド人のウィリアム・ウィ

リス医師らがおりました。

また、外交官としての立場は所謂ヒラであったにもかかわらず、宮廷儀式に参列した経験があることから明治天皇とも謁見しています。この謁見のことは、後に触れるとして、この本は一九一五年に彼が晩年になってからロンドンで出版したもので、幕末から明治にかけての日本の様子を、特に要人中の要人との謁見の様子を記録した貴重な資料と言えます。

それでは、彼が魅了された日本について、紹介していきましょう。

まず彼は建物の美しさについて語っています。將軍徳川慶喜公との謁見のため大坂や京都を訪れています。大坂城について、

「大坂城は、現在もそうだが、城砦の外観に限る限り、豊臣秀吉の栄光の最後を飾る封建時代の巨大な記念物である……その石垣は昔、ケンプエルが七尋の厚みがあると書いた通り、花崗岩の大きな切り石と切り石とを不規則な形で漆喰も使わずに積み上げたもので、その巨大な姿は、どっしりとして驚異の念を起こさせるものであった……それは気品高い建築で、濠があり、非常に簡素で、これといった特徴がないが、その単純な美しさは、その偉観をさらに引き立てていた」

と記したり、清水寺や知恩院について、「その美しい寺は、周囲を丘や林や池などで、これ以上ないほど優雅に囲まれた聖域に隠れるようにして建っていた」(※清水寺)

「部屋は全く壮麗なそのもので、念入りな作法によって、数多くの珍珠が供応されたが、それは日本のルクルス(大富豪で贅沢な生活を送ったことで知られるローマの將軍)ともいふべき偉大な尼利義政公でさえも満足させたであろう」(※知恩院)

と、その美しさを絶賛しています。

また、彼は日本人のおもてなしについて感銘を受けたことも記しています。幕末当時イギリスは、停泊地の新潟が砂州があることで不便な状況だったため、小さな島で一部が塞がれている七尾湾の開港を加賀藩に迫ります。その交渉のため、彼がアーネスト・サトウと共に加賀を訪れた時のことです。

「宿屋につくと、そこで我々は日本の典型的なおもてなし方で迎えられたのであるが、それはきわめてもったいぶって、礼儀正しく丁寧な接待であった。居間には毛羽のあるビロードの絨毯が敷いてあり、どこかの寺から持ってきた赤い漆塗りの椅子が我々のために用意されていたが、

接待する側としては我々が日本に長く滞在して畳の上に座る習慣に慣らされていることを知らなかったのだろう」

「翌八月十四日の朝、再来を請う人々の声に送られて、名残を惜しみながら別れを告げ、再び旅の途についた」

「我々の受けた歓待に対して、サトウが日本語に訳した感謝状を私から手渡した。彼らはいへん丁寧に別れを告げて去って行った」

加賀で受けた心のこもった大歓迎に、とても感動した様子が伝わってきます。

さらに他にも、こうした日本流のおもてなし文化についての記述があります。

明治の時代が始まって早々に、ウィクトリア女王の第二王子エジンバラ公が明治天皇を訪問するために来日します。日本政府は、外国の王子が天皇を訪問するのは初めてのことでしたので、おもてなしに準備不足がないようパークス公使を通じて、彼に助勢依頼がありました。一方、日本政府と関わる中で、彼は日本政府側が行った殿下をお迎えする非常に丁寧な儀式を目の当たりにしました。それを次のように記録しています。

「殿下が日本に到着するに先立って、その航海の安全を祈願して、韓神祭の儀式がおこなわれる」。韓神は文字通りに

いえば、韓国(中国)の神である。これは朝鮮を通じて中国と接する以外には外国との交際がなかった大昔の儀式の復活であった。それゆえ、韓神とは外国人の守り神であって、外国人はすべてこの神の庇護のもとにあり、総称して『唐人』、すなわち、中国の唐時代の人と呼ばれていた。

『殿下が江戸の宿舎へ出発される前日は、道路は掃き清め、修理される。そして道中の安全を祈願して道路の神への祈り(路次祭)が捧げられる』

『殿下が江戸に到着を予定される日に、その道筋に当たる品川の在で、悪霊を祓い清める宗教的儀式(高輪八山の麓で行われた送神祭)が行われる。殿下が到着されると皇族(仁和寺宮嘉彰親王)が訪問され、殿下の安着を悦ぶ挨拶をする』

『殿下が皇居の門を入るとき、ぬさと称する儀式(祓麻事)が行われる。』

現代でも神社では、大麻で参拝者を清め祓いしてから、神事を行います。古くから祓い清めることで清浄を保ち、そして準備が整ったところで神々に祈りを捧げることが行われてきたことがわかります。

こうした祭りの精神こそが、日本人の根底にあるおもてなし文化に通じていることがお分かりいただけるのではないのでしょうか。